

1. 本研究は「家政学における人間の居住性について」第12回東北，北海道支部総会において発表した論旨を一つの拠点として，人間を中心課題とする思想傾向をたどる実存哲学者の人間存在の周辺より，家政学的推論を試み，人間の場，行為，行動を主体と客体との対象より思考し，血縁集団と目的集団との関係を論述し，家政学の定義への近接をはかろうとするものである。

2. O. F. ボルノウの「人間とその家」ハイデッガーの「時間と存在」との論文等より，人間の守護性と非守護性との対立のなかに，人間生活の基本体としての家庭および類似家庭を量的にとらえ，非守護の状況下の人間に安住性を与える内容へと進展せしめる。

3. 試論としての論述は，自然科学的な意味の成果を報告するにはいたらない。しかし，家政学が人間生活および人間集団生活への貢献は「生き甲斐ある生活」「将来にいたる生活を一層可能なように発展せしめる生活」を意図することにかかるものとの視点より，対立する人間学的思想傾向のなかから，家政学の本質規定として根源的なものを得，家政学の学的充実に寄与できると思料される。